

NHKスペシャル

阪神・淡路大震災25年 調査報告・大人になった“震災の子”

2020年1月17日(金)午後10:00~10:49(総合テレビ)



阪神・淡路大震災から四半世紀、25年の歳月が過ぎた。この節目の年に社会心理学の専門家と協力し、これまでに前例のない大規模調査を行った。対象は震災当時、小・中学生(6~15歳)だった子ども、いわゆる“震災の子”だ。現在31歳~40歳となった人たちに、震災が「その後の生き方」や「進路」などにどのような影響を与えたか聞いた。回答が得られたおよそ600人のアンケート結果の分析が進む中で、専門家も驚く結果が明らかに。「家族を亡くした」「自宅が全壊」など、被災程度が高い人のうち、「今では震災体験を前向きに捉えている」と答えた人が6割近くにのぼった。一方で、「今も思い出したくない」「触れて欲しくない」と答える人が2割近くにのぼることも分かった。この分岐点はどこにあったのか。分析・取材を進めると「先生」や「近所の大人」など家族以外の「周囲の大人」の存在がカギとして浮かび上がってきた。“震災の子”がたどってきた25年間をひもとくことで、神戸から全国の被災地へ、新たな教訓を伝える。

番組ナビゲーターは、小学生の時に神戸で被災した俳優・北川景子さん。

2019年12月18日

報道資料

NHK広報局

BS1スペシャル
阪神・淡路大震災25年
“しあわせ運べるように”～神戸が生んだ奇跡の歌～

1月18日(土) BS1 前10:00～11:50

1995年1月17日、阪神・淡路大震災。あの日、がれきの街と化した神戸で「しあわせ運べるように」は生まれた。「地震にも負けない強い心をもって 傷ついた神戸をもとの姿に戻そう・・・」。被災地を勇気づけた希望の歌は中越地震、四川大地震、東日本大震災、熊本地震、国内外の被災地に広まり傷ついた人々を励ましてきた“奇跡の歌”だ。今も追悼式典で歌い続ける旧山古志村。福島合唱団は歌を通じて、神戸の子どもたちと交流を続け、震災25年の2020年1月、神戸を訪れる。熊本では仮設住宅に合唱団が生まれ、子どもたちの歌声が人々を支えている。「届けたいわたしたちの歌 しあわせ運べるように・・・」。四半世紀の時を超えて被災地をつなぐ歌を通し、さまざまな困難を乗り越え生きる力を届けたい。



1995年2月、避難所となった小学校の校庭で初めて「しあわせ運べるように」を歌う



2013年11月、全町避難の浪江町の人たちと一緒に仮設住宅で歌う福島の子どもたち



2019年4月、益城町の仮設住宅の追悼式典で歌う熊本の子どもたち



2019年12月、「神戸ルミナリエ」で共に歌う神戸、福島、熊本の子どもたち

2019年12月18日

報道資料

NHK広報局

関西発ラジオ深夜便 阪神・淡路大震災25年特集

「知らない世代に、伝えたいこと」

2020年1月16日(木) 後11:05~翌17日(金) 前5:55 ラジオ第1

(前1:00~5:00 FM同時放送)

「直下型」の激しい地震の揺れが大都市に何をもたらすのか。そのことをまざまざと突き付けた阪神・淡路大震災から、2020年の1月17日で25年となる。震災後に生まれた世代が次々と成人していく時期となり、震災の経験や教訓を若い世代にどう伝えていくかが大きな課題となっているなか、「関西発ラジオ深夜便」では、「知らない世代に、伝えたいこと」と題して25年の特番を放送する。通常午前5時で終わる「ラジオ深夜便」を約1時間拡大し、地震の発生した時刻「5時46分」を含め、6時前まで阪神・淡路大震災について伝えていく。

アンカーは自ら阪神・淡路大震災を神戸市灘区で経験した住田功一アナウンサーと、神戸放送局の北郷三穂子アナウンサー。ゲストに、当時神戸大学の落語研究会に所属し、地震の後ボランティアに奔走した落語家の桂吉弥さん、震災の体験を伝える活動をしている神戸大学メディア研の学生もスタジオに迎えてお伝えする。桂吉弥さんやスポーツ選手への震災経験のインタビュー、震災に関する絵本の朗読、お便りの紹介、亡くなった人たちを追悼する場からの中継も交えて、遺族の思いを伝え、「震災を知る世代から知らない世代へどう伝えるのか」を考える。



桂吉弥さん



住田功一アナウンサー
(NHK大阪拠点放送局)



北郷三穂子アナウンサー
(NHK神戸放送局)